第92号

# 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要

2024年2月　　泉佐野市教育委員会

## 湊遺跡（11－3区の調査）

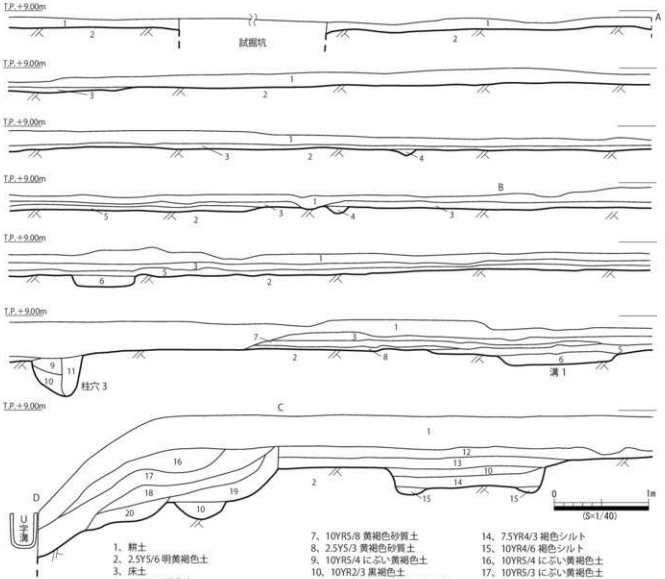
調査地　：泉佐野市中庄1734番1他11筆・水路
調査期間：平成23年11月14日～12月12日
調査面積：640㎡

### 調査に至る経過

湊遺跡は佐野川左岸に熊野街道を跨いで広がる遺跡である。地形的には北半分を低位段丘が、南半分を中位段丘が占める。本遺跡は古墳時代前期製塩土器の大量出土によって著名であるが、2010 年度の調査（湊 09－8 区）で弥生時代中期の竪穴式住居跡群が確認され、当時の集落が近辺に広がっていたことが判明した。今回調査地は、その 09－8 区の南西にほぼ隣接している。09－8 区及び本調査地付近は開析谷に挟まれた鞍部の中位段丘に位置していると想定される。

調査は双伸商事㈱が当地において計画した宅地造成工事を契機とする。届け出を受けて申請地内の位置指定道路部分に 14 基のトレンチを設定し、平成 23 年 10 月 17 日から 20 日にかけて確認調査を行った。その結果、溝や土坑、柱穴等が古墳時代後期の遺物と共に検出された。また、鞍部から下る開析谷内の南西部

第1図　調査区位置図及び設定図（白ヌキ部分）




第2図　南北道路東側壁面図（図中の現地表面アルファベットは第7図中のものに対応する）

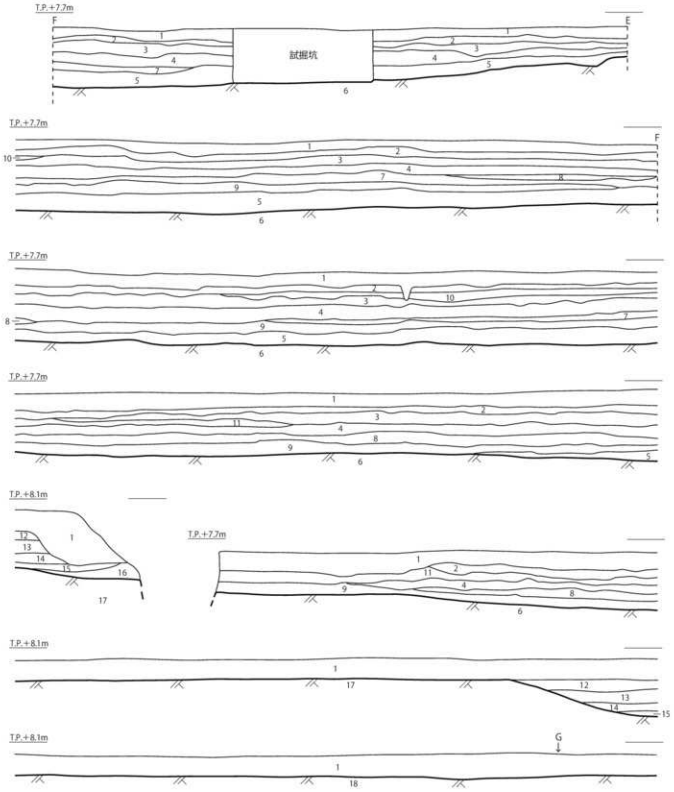
では遺構が確認されないことも判明した。この成果を受けて申請者と協議を行い、位置指定道路部分の遺構が確認された範囲において記録保存調査を行うことで合意を得た。なお、記録保存調査に係る費用は双伸商事㈱が負担した。

## 調査の成果

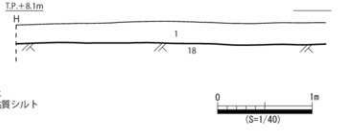
a）層位

調査区は概ねT字形を呈しており、ちょうど付け根の部分に中位段丘端部から開析谷に落ち込む段丘崖が東西に走っている。よって以後、中位段丘に位置するT字の縦棒部分の道路を南北道路、開析谷内に位置するT字の横棒部分の道路を東西道路と呼称する。

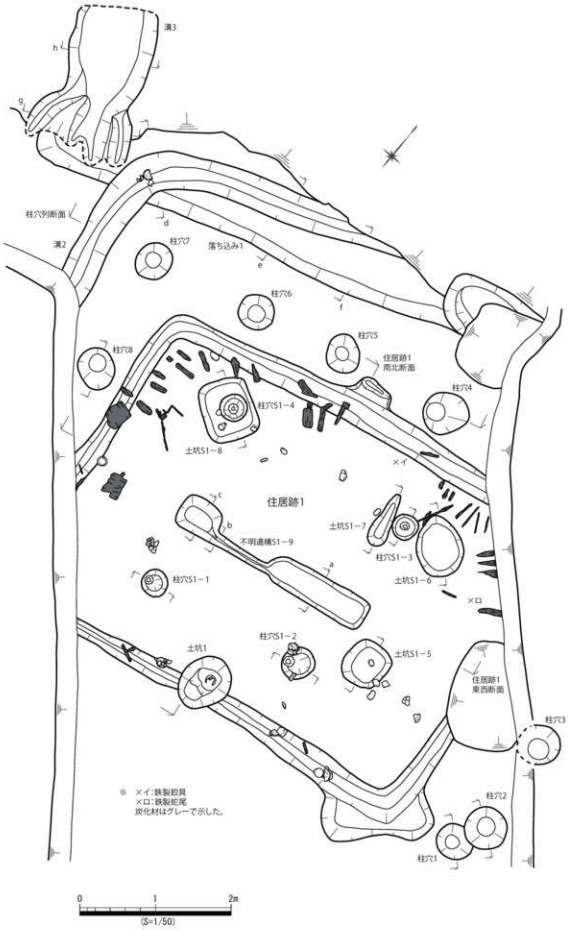
第２図に南北道路の東側壁面図を示した。中位段丘の地山レベルは南東から北西に向かって緩やかに下っている。南東端では耕作土直下で地山が検出されるが、北に行くにしたがって床土が貼られるようになり、堆積層も確認される。南東端では現地表から地山まで－0.1m程の深さを測るが、北西端では－0.6m程の深さになり、中位段丘が開析谷に落ち込む部分で現地表、地山レベル共に急激に下がる。調査区内での落込む肩は後世に侵されている。



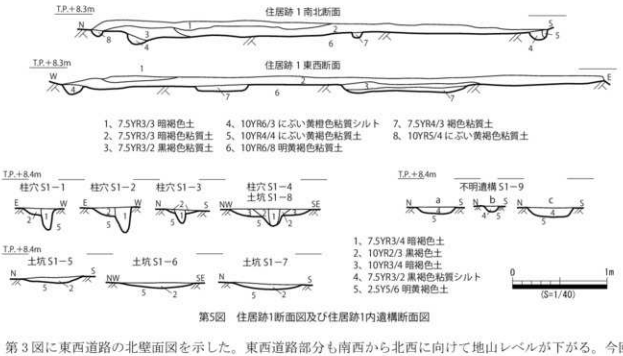

1、耕土
2、床土
3、10YR6/8 明黄褐色土
4、10YR5/4 にぶい黄褐色土
5、10YR3/3 暗褐色土
6、10YR7/8 黄橙色シルト
7、10YR4/4 褐色土
8、10YR4/2 灰黄褐色土
9、10YR7/4 にぶい黄橙色砂質シルト
10、2.5Y3/4 黄褐色土
11、10YR6/3 にぶい黄橙色土
12、10YR5/3 にぶい黄褐色土
13、10YR5/2 灰黄褐色土
14、2.5Y4/3 オリーブ褐色土
15、2.5Y4/2 暗灰黄色土
16、10YR6/2 灰黄褐色粗砂混砂質土
17、10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混粘質シルト
18、2.5Y7/3 浅黄色細砂




第3図　東西道路北側壁面図（図中の現地表面アルファベットは第7図中のものに対応する）




第4図　住居跡1遺構平面図




第5図　住居跡1断面図及び住居跡1内遺構断面図

第３図に東西道路の北壁面図を示した。東西道路部分も南西から北西に向けて地山レベルが下がる。今回調査で検出された土坑３の存在や、確認調査でもほぼ完形の須恵器坏身２点、坏蓋１点を埋置した土坑、径0.5mを測る柱穴等が検出されていることから開析谷内は当時ある程度安定し、生活範囲として利用されていた様子が窺える。遺構が検出される北東2/3 部分の地山が黄橙色シルトであるのに比して東西道路南西1/3 部分は地山が砂へと変化し、遺構や遺物は確認されなくなる。開析谷が安定していない部分にあたるのであろう。

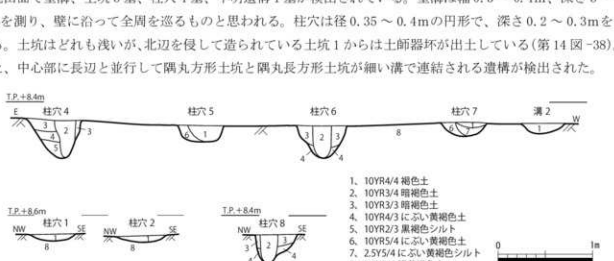
b）遺構

検出された遺構群は古墳時代後期、中世、近世の３時期にわたる。時代を追って報告する。

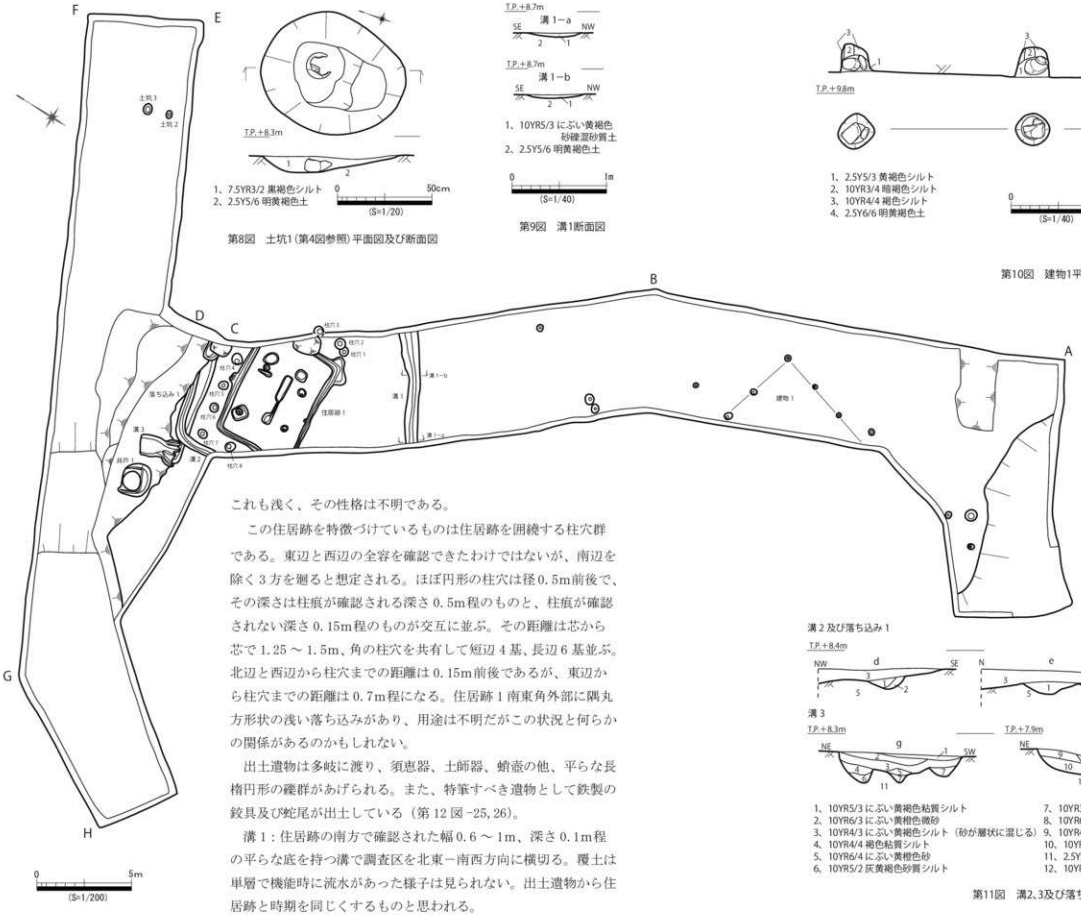
古墳時代後期

溝、柱穴、竪穴式住居跡、土坑が確認されている。

竪穴住居跡（住居跡１）：南北道路、北東端で検出された短辺 4.6m、長辺 6.3m を測る長方形状の住居跡で検出面から床面までの深さは 0.2m 程である。北東及び南西角が調査区外に逃げている。覆土を少し下げたところで中心から放射状に炭化材が検出され、本住居跡が焼失住居であることが判明した。ただ、炭化材は縁辺部にのみ見られ、中心部にはほとんど残っていなかった。張床は確認できなかったが、床面と思われる地山面で壁溝、土坑５基、柱穴４基、不明遺構１基が検出されている。壁溝は幅 0.3 ～ 0.4m、深さ５～８㎝を測り、壁に沿って全周を巡るものと思われる。柱穴は径 0.35 ～ 0.4m の円形で、深さ 0.2 ～ 0.3m を測る。土坑はどれも浅いが、北辺を侵して造られている土坑１からは土師器坏が出土している（第 14 図 -38）。また、中心部に長辺と並行して隅丸方形土坑と隅丸長方形土坑が細い溝で連結される遺構が検出された。




第6図　住居跡1囲繞柱穴群断面図




第8図　土坑1（第4図参照）平面図及び断面図

第9図　溝1断面図

第10図　建物1平面図及び断面図

第7図　調査区遺構平面図

これも浅く、その性格は不明である。

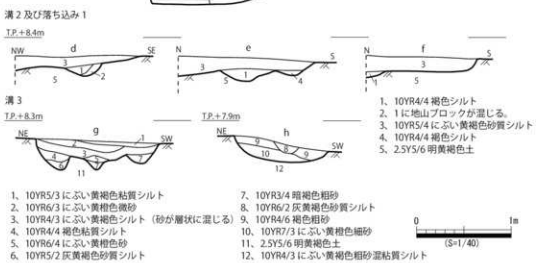
この住居跡を特徴づけているものは住居跡を囲繞する柱穴群である。東辺と西辺の全容を確認できたわけではないが、南辺を除く3方を廻ると想定される。ほぼ円形の柱穴は径0.5m前後で、その深さは柱痕が確認される深さ0.5m程のものと、柱痕が確認されない深さ0.15m程のものが交互に並ぶ。その距離は芯から芯で1.25～1.5m、角の柱穴を共有して短辺4基、長辺6基並ぶ。北辺と西辺から柱穴までの距離は0.15m前後であるが、東辺から柱穴までの距離は0.7m程になる。住居跡1南東角外部に隅丸方形状の浅い落ち込みがあり、用途は不明だがこの状況と何らかの関係があるのかもしれない。

出土遺物は多岐に渡り、須恵器、土師器、蛸壺の他、平らな長楕円形の礫群があげられる。また、特筆すべき遺物として鉄製の鉸具及び蛇尾が出土している（第12図−25,26）。

溝1：住居跡の南方で確認された幅0.6～1m、深さ0.1m程の平らな底を持つ溝で調査区を北東−南西方向に横切る。覆土は単層で機能時に流水があった様子は見られない。出土遺物から住居跡と時期を同じくするものと思われる。

溝2：住居跡の西辺及び北辺に沿って屈曲する溝で幅0.5m前後、住居跡検出面からの深さは0.25mになる。機能時に流水があった様子は見られないが、明らかに住居跡1を意識して掘削さ

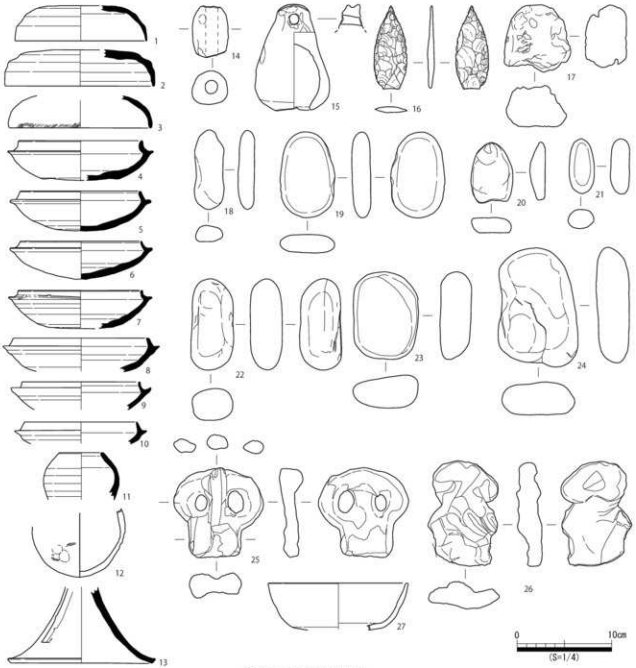




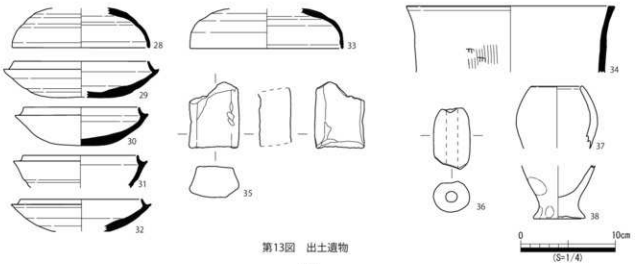

第11図　溝2,3及び落ち込み1断面図

れている。溝1と接続して住居跡を囲む可能性も考えられる。

溝3：溝2の西側で検出された幅1～1.2m、深さ0.3～0.4mを測る南北方向の溝である。北端は近代の耕地造成によって攪乱されているが、南端は住居跡が建設される際に削平されたと思われる平坦面に侵さ




第12図　住居跡1出土遺物




第13図　出土遺物

れている。溝の底は起伏があり、砂が溜まっていることから機能時の流水が想定される。溝３は住居跡と時期的に相違ないと考えられ、機能していたものを廃して平坦地を造成し、住居を建てたものであろう。

中世

掘立柱建物１：南北道路北西で検出された掘立柱建物で、東西２間、南北３間の北東角部分が調査区内で確認され、それ以外は調査区外に逃げている。建物の方向は北向きで少し東に振っており、柱間は２～2.4mを測る。東西辺３基の柱穴からは礎石が出土している。

近世

井戸１：溝３西側で検出された掘り方が径1.8mの略円形で、井戸自体は一辺1.4mの方形で木枠のものである。出土遺物から近世後期以降のものと思われる。

確認調査

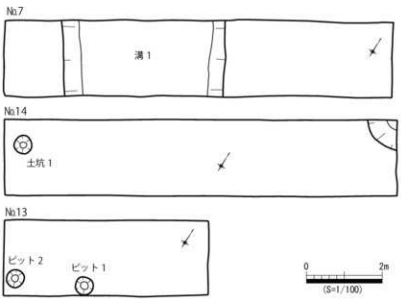
開析谷内での遺構の検出は土坑２基に止まったが、確認調査では№13、14トレンチで柱穴や須恵器埋納土坑（土坑１）が検出されている。また、中位段丘面上でも№7トレンチで幅4.2m、深さ0.1mを測り、北西－南東方向に走る溝が確認されている。溝の北西延長上を今回調査地が横切るが、段丘崖に当たるためかその延長は見当たらない。№7トレンチ溝では機能時流水があった様子は窺えないが、東に振って溝３と接続する可能性も考えられよう。

## まとめ

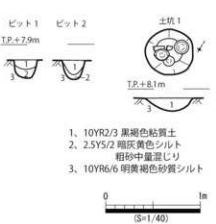
今回の調査で確認された遺構は３時期に渡るが、近世は井戸のみ、中世も掘立柱建物１棟の部分検出に止まり、それぞれの状況を俯瞰するには至らない。残りの古墳時代後期遺構群について触れる。

筆頭は住居跡１の確認であろう。この遺構が開発道路幅いっぱいに検出された僥倖に感謝せざるを得ない。この住居跡を特徴付けているものは竪穴住居跡の周りを囲繞する柱穴であろう。竪穴外柱穴を持つ竪穴住居跡は数は少ないが普遍に見られる。柱を巡らし、その間に板を渡したり、粘土を貼ったりして壁を構築

第14図　確認調査トレンチ設定図



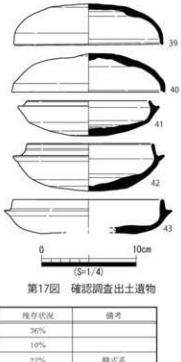

第 15 図　湊 11-3 区確認調査遺構平面図




第 16 図　湊 11-3 区確認調査遺構断面図
及び遺物出土状況図

したものと考えられている。ただ、柱の規模や数、配置などに多様性があり、上部構造も含めて未だ不明なことが多い住居跡であると言えよう。

住居跡１の覆土には粘土塊等、土壁の材料となるようなものは含まれていなかったが、焼失後の炭化材として放射状に並ぶ材や板が出土している。放射状に並ぶ材は垂木が崩落したものと想定されるが、板は葺き材か壁材か判断できない。竪穴外柱穴は竪穴住居の南辺で検出されず、その上部構造に北側に落ちる斜面を利用した片落屋根の可能性を想定したが、屋根から落ちる雨を排水する雨落溝は確認できず、東西両辺に並ぶ柱穴も北辺のものと変わりないものであることからも、別の上部を考えざるを得ない。中位段丘及び開析谷内には居住可能な平坦地が見込まれたはずで（09-8 区成果より）、わざわざ中位段丘端部の斜面を選んで住居を構築したのか不明である。他の特徴として竈が確認されないこと、



第17図　確認調査出土遺物

表1　遺物観察表（湊11-3区）

| 挿図番号 | 遺跡名・地区名 | 遺構・層 | 種類 | 口径（cm） | 器高（cm） | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第10図－1 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏蓋 | (14.0) | 3.8 | 36% | |
| 第10図－2 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏蓋 | (15.8) | 4.8 | 10% | |
| 第10図－3 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏蓋 | (15.0) | (3.4) | 22% | 韓式系 |
| 第10図－4 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏身 | (13.0) | 4.2 | 28% | |
| 第10図－5 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏身 | (12.6) | 4.2 | 25% | |
| 第10図－6 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏身 | (12.8) | 4.0 | 65% | |
| 第10図－7 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏身 | (13.1) | 4.0 | 30% | |
| 第10図－8 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏身 | (14.4) | (3.5) | 25% | |
| 第10図－9 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏身 | (12.5) | (2.9) | 25% | |
| 第10図－10 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器坏身 | (12.0) | (2.3) | 12% | |
| 第10図－11 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器小壺 | (4.6) | (5.0) | 15% | |
| 第10図－12 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 土師器小型丸底壺 | 胴部径（9.85） | (7.2) | 底部のみ | |
| 第10図－13 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 須恵器高坏 | 脚部径（15.6） | (8.05) | 脚部25% | 韓式系 |
| 第10図－14 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 土師質土錘 | 最大幅3.8 | 長さ（3.45） | | |
| 第10図－15 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 土師質紡錘 | 最大幅7.7 | 11.7 | 65% | |
| 第10図－16 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 石鏃 | 幅1.8 | 長さ4.4 | 厚さ0.35cm | サヌカイト製 |
| 第10図－17 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅7.05 | 長さ7.1 | 厚さ4.1cm | |
| 第10図－18 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅3.1 | 長さ8.4 | 厚さ1.7cm | |
| 第10図－19 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅5.75 | 長さ9.05 | 厚さ1.95cm | |
| 第10図－20 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅4.4 | 長さ6.1 | 厚さ1.6cm | |
| 第10図－21 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅2.6 | 長さ5.8 | 厚さ2.0cm | |
| 第10図－22 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅4.5 | 長さ9.65 | 厚さ3.35cm | |
| 第10図－23 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅6.2 | 長さ9.2 | 厚さ3.25cm | |
| 第10図－24 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 不明石製品 | 幅8.35 | 長さ12.2 | 厚さ3.5cm | |
| 第10図－25 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 鉄製紡具 | 幅4.75 | 長さ4.75 | 厚さ1.25cm | |
| 第10図－26 | 湊11-3区 | 住居跡1 | 鉄製蛇尾 | 幅3.7 | 長さ5.6 | 厚さ1.3cm | |
| 第10図－27 | 湊11-3区 | 住居跡1・土坑1 | 土師器坏 | (14.6) | (4.95) | 50% | |
| 第13図－28 | 湊11-3区 | 落込み1 | 須恵器坏蓋 | (14.6) | (4.15) | 65% | |
| 第13図－29 | 湊11-3区 | 包含層 | 須恵器坏身 | (14.3) | 3.8 | 20% | |
| 第13図－30 | 湊11-3区 | 溝2 | 須恵器坏身 | (12.3) | 4.1 | 60% | |
| 第13図－31 | 湊11-3区 | 溝3 | 須恵器坏身 | (12.2) | (3.4) | 20% | |
| 第13図－32 | 湊11-3区 | 溝3 | 須恵器坏身 | (12.8) | (3.4) | 10% | |
| 第13図－33 | 湊11-3区 | 包含層 | 須恵器坏蓋 | (16.2) | (4.2) | 5% | |
| 第13図－34 | 湊11-3区 | 包含層 | 須恵器甑 | (21.8) | (7.8) | 8% | |
| 第13図－35 | 湊11-3区 | 溝3 | 砥石 | 幅5.25 | 長さ（7.0） | 厚さ3.4cm | |
| 第13図－36 | 湊11-3区 | 包含層 | 土師質土錘 | 幅3.8 | 長さ（6.5） | | |
| 第13図－37 | 湊11-3区 | 包含層 | 土師器小壺 | (5.2) | (6.6) | 50% | |
| 第13図－38 | 湊11-3区 | 溝1 | 土師質製塩土器 | 脚裾径5.2 | (5.6) | 底部のみ | |
| 第17図－39 | 湊11-3区 | №14　土坑1 | 須恵器坏蓋 | 15.8 | 4.35 | 80% | 破質 |
| 第17図－40 | 湊11-3区 | №7　溝1 | 須恵器坏身 | (16.2) | 4.7 | 50% | |
| 第17図－41 | 湊11-3区 | №14　土坑1 | 須恵器坏身 | 13.2 | 3.7 | 80% | 破質 |
| 第17図－42 | 湊11-3区 | №14　土坑1 | 須恵器坏身 | 13.3 | 4.2 | ほぼ完形 | |
| 第17図－43 | 湊11-3区 | №7　溝1 | 須恵器坏身 | (16.0) | 3.5 | 30% | |

※口径の（　）は復元、長さ、幅、器高の（　）は残存を示す。

長方形であること、鉄製のベルトを使用する人物が利用していたこと等があげられ、特殊な用途に使用された空間ではないかと考える。

今回調査地は湊遺跡内で開析谷を二分する舌状の中位段丘の縁辺で、今回調査地北東に接する 09-8 区の成果も併せて弥生時代中期中葉、後期、古墳時代後期と、これまで遺物の出土のみで未確認であった集落に関する遺構群が確認されている。いずれも複合遺跡である湊遺跡の集落の変遷における空白を埋めるもので貴重な成果である。湊遺跡での集落の初現は弥生時代中期中葉にさかのぼる。開析谷内の中位段丘は 3 方を谷に囲まれた天然の要害地であり、部分的に安定しはじめた開析谷内にもその居住範囲は広がっていた。集落は後期までは中位段丘に留まっていたが、その後、開析谷右岸での古墳時代前期遺物の大量廃棄からその範囲は対岸の低位段丘まで広がっていったと考えられる。古墳時代後期まで継続した集落は中位段丘では廃絶し再び生活の痕跡が確認されるのは中世を待たなければならない。集落はその中心を低位段丘に移したと想定され、飛鳥時代以降は規模と場所を換えて確認される。ただ、飛鳥時代集落は縁辺部か開析谷中でしか確認されていない。日新小学校及び附近で確認された奈良時代掘立柱建物群は日根郡近義郷の郷衙とも目され、低位段丘ではそれ以前の遺構は失われている。奈良時代建物群成立時に低位段丘では大規模な削平が実施され、その範囲は中位段丘にまで及んだ可能性が想定されよう。

住居跡 1 検出状況

住居跡 1 床面検出状況

住居跡 1 炭化材出土状況

住居跡 1 内遺構検出状況

住居跡 1 完掘状況

住居跡 1 内鉸具出土状況

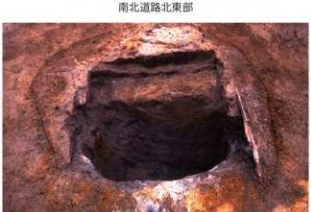
住居跡１柱穴６

住居跡１（北から）

東西道路南西部

南北道路北東部

中世掘立柱建物北辺中央柱穴



近世井戸１

## 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | みなといせき |
| 書名 | 湊遺跡 |
| 副書名 | 11－3区の調査 |
| シリーズ名 | 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 |
| シリーズ番号 | 68 |
| 編著者名 | 貝川　克士 |
| 編集機関 | 泉佐野市教育委員会文化財保護課 |
| 所在地 | 〒598－0056　大阪府泉佐野市元町4-5　旧朝日湯内　℡ 072-447-6766 |
| 発行年月日 | 2024年2月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°　′　″ | 東経<br>°　′　″ | 調査期間 | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| みなといせき<br>湊遺跡 | いずみさの　ひがしこう<br>泉佐野市中庄1734-1<br>他11筆、水路敷 | 27213 | 85 | 34 24 35 | 135 19 30 | 2011/11/14～<br>2011/12/12 | 640 | 宅地造成 |

| 所収遺跡名 | 主な時代 | 種別 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 湊遺跡 | 古墳・中世 | 集落跡 | 竪穴住居跡、掘立柱建物 | 須恵器、土師器、瓦器椀、鉄製鉸具、鉄製蛇尾 | 竪穴住居跡の周囲を柱穴が囲む。 |